

論説

海は常に間近にあり、磯の音、海で働く人々の活気あふる生活があつた氣仙沼。海は、まさに生活の一 部であり、貴重な財産と考える地域住民にとつて、これまで幾度となく襲ってきた津波は、その都度、多くのものを奪つていったが、それでも海を愛し、海と共に生きる未来を選択しようとしているのが市民だ。

津波への備えは未来永劫万全でなければならぬが、津波防災は、ただ一つの防災機能によつて実現するものではなく、防潮堤は津波防災の一つだ。最良の津波防災対策は、実現していくために防潮堤の持つ防災

法による防潮堤パターンの考察などを学ぶにつれて、「計画ありき」の感が強まってしまふ。

三陸沿岸には「地震」があったら津波の用心の石碑がいたるところがあり、いち早く高台に「逃げる」のが鉄則と教わってきた。その中には「津波でんでん

効果を熟知し、同時に弱点や地域生活、地域文化などへの影響を熟考する必要があると設立されたのが「防潮堤を勉強する会」という。何回かの勉強会に参加し、防潮堤の基本的な流れとルート、宮城県議会での論議の経緯、国の考え方と県や市の役割、背後地の利用方

この話もある。いのちを守るために逃げることが最優先されなければならない。生きてさえいれば生きる。だとすれば、今回の大震災を教訓に、避難道整備やライフラインの確保策、避難マニュアルなどが、優先されるべきなのに、被

と千年後という確証はない。いつ来るか分かず、明治三陸大津波級（レベル1）だって予測できない中で、「逃げる」ことが最優先されることは、そのための防潮堤をつくるというのなら分かる。

しかし、巨大堤防は生態系などは一切考慮されていない。そんなことを考慮していたら何年かかるか分からぬといふ。巨大堤防を築いてしまってから海と共に生きる生活基盤を失い、「やつぱりまたかつた」では済まずかず、拙速は避けるべきと思う。

「計画ありき」に見える防潮堤

2012年8月21日付『三陸新報』2面